

## イラン短期研修報告書

大阪大学 人間科学部 臨床心理学分野

滝澤 鋼一

2018年12月20日～12月30日に「2018年度イラン短期研修プログラム」が実施された。私がプログラムに参加した目的は、現地に赴くことでイランの実像をとらえて理解することを通して、イランの本当の姿を日本に伝えることであった。研修に参加する前の私にとってイランとは中東の一国であり、中東と言えば資源、イスラム教、テロリズムなど私たちの日常とは異なるように思える光景や固定観念が頭に浮かんでいた。しかし、往々にしてイメージは現実を反映しない。そのため、現地へと向かい自分の目でイメージと現実とを比較する必要がある。また、私は日本と中国について取り上げたラジオ番組を主催しており、このプログラムで得た経験を番組内で取り上げることによって多文化的な視点でイランについて理解し発信することができると感じた。そして今回のプログラム参加をきっかけに日本・中国・イランの交流を深める契機となりたいと考えた。

プログラムの前半部分は首都のテヘランにて、イラン外務省付属大学院の SIR

(School of International Relations) においての講義を中心として、イラン外務省職員や国会議員、学生との意見交換の場も積極的に設けられた。講義や意見交換を通して特に印象に残ったのはイランの経済的な潜在能力だ。周知のように、イランはアメリカから長年にわたって経済制裁を受けている国だ。そのため、渡航前までイランに対しては高層ビルが立ち並ぶような経済的に発展したイメージを持っていなかった。しかし実際にイランに赴くと、大量の車が行き交う交差点や人々の活気、そして夜には常にライトアップされている歩道や建物、光り輝く夜景に圧倒された。



Reza 教授の講義ではイランのエネルギー政策についてお話を伺った。この講義でイランは単に天然資源が豊富な国というだけではなく、その活用においても中東の他国と比べて進歩していると実感した。また、防災や医療など、日本がイランに貢献することができる領域が多く存在することも発見できた。経済制裁が解除され、多国間の連携がさらに取れるようになれば、大きな発展へとつながるだろう。そのために、まず

は歴史的にイランと友好関係を保ってきた日本が官民一体となって積極的にイランに働きかけることが必要であると感じた。学生との意見交換については、イランから見たアジアの国々や宗教・文化について共有することができたことが貴重な経験となっ

た。

テヘランでは、博物館や歴史的な建物を巡ることでイランの歴史や文化にも触れることができた。特に印象的だった場所は、**Tehran Peace Museum** だ。この博物館では主にイランイラク戦争におけるイランへの化学兵器使用について展示されていた。私たちが見学したときは実際に化学兵器の被害を受けた方が展示を回って説明してくださり、教科書上の知識でしかなかった戦争について生々しく触れることができた。なぜ化学兵器によって、つらい経験をしたのにも関わらず化学兵器について想起される場所で働いているのか質問したところ「確かに過去を思い出してしまうのでつらいが、私がここで働くことで世界から戦争や化学兵器をなくすことにつながればいい」とおっしゃっていたことが印象的であった。また「戦争がなくなるように神に祈っている」とおっしゃっていたのも宗教が PTSD などの心の傷をいやすことにつながるヒントとなるのではと感じ、宗教と心理療法について考えるきっかけとなった。

プログラムの後半では、イスファハーンとカーシャーンへと地方視察に向かった。この2つの都市には名所旧跡が多く存在していた。多種多様なモスクへと足を運んだ際には、どのモスクも非常に緻密に作られており数百年前から続く信仰の奥深さを感じた。このようなモスクは観光名所としても有名であるが、北京や上海からの中国人観光客が多く訪れていた。私たちも街を歩けば ”Chinese?” と声をかけられることが多かったのが印象的であったが、中国語を勉強している SIR の学生に話を聞くと、実際にイランと中国の間での留学や交流が増えているとのことであった。今回のプログラムを通して、中東地域における中国の影響力の増加を実感する場面も多くあった。



普段の大学生活において、中東を意識することは少なかった。しかし、このプログラムは、宗教と心理学のつながりや日本・中国・イランの3国間の関係など新しい視点から物事を考えるきっかけとなり、多くの刺激をもらいながら自分の視野を広げることができた。また、社会に出た後も何らかの形でイランに関わることができたらと期待している。今回のプログラムは世界に触れる非常に貴重な機会となった。この経験を今後の研究や仕事に活かすことで日本・イランにとどまらない国際的な発展に貢献したい。

イラン短期研修を主宰してくださった笹川平和財団をはじめとして、引率として付き添ってくださった横山さん、SIR の皆様、そしてプログラムに関係するすべての皆様へ感謝を述べて、結びの言葉とする。